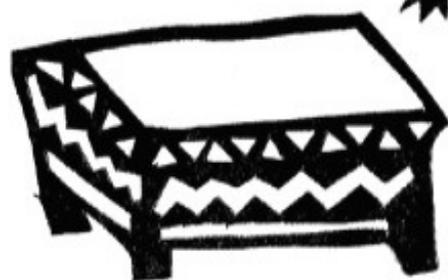


黄
金
桂

ふ
あ
ん
じ
ん
ぐ
い



中国短編小説集 四

春秋梅菊 著

竜の髭 刊行

お題目 註…括弧内は時代とジャンルです

曹-SAW (三国時代・ホラー)	……………2
姉妹の物語に出会う時 (清代・ファンタジー)	……………10
穢れの無い若者達 (現代・現代小説)	……………24
あとがき	……………36

曹一S A W

目が覚めると、薄暗い部屋の中であつた。湿っぽく、この世のものとは思えないほどの寒気が肌を突き刺す。

頭を揺り動かした黄騰^{こうとう}は、じやらりと薄気味の悪い音を耳にして、視線を落とした。

鉄の首輪がかけられている。

「な、何だ。これは……」

その首輪は鎖で石造りの壁に繋がれていた。すっかり目が覚め、周囲を見回と、すぐ横に別の男が倒れていた。同じ徐晃^{じょこう} 將軍配下の軍人、方綺だ。

「おい、方殿。起きろ」

方綺^{ほうき}が瞳をしばたいて、体を起こした。

「黄殿……？ おや、ここは——」彼もまた、自分が鎖に繋がれているのに気がついた。「何だ、どういうことだ？」

「わしにもわからん」

彼らのいる場所は、酷く狭いうえに、じめじめしていた。見上げると、天井に丸い穴が開き、そこから灰色の光が注いでいる。どうやらここは井戸の底らしい。しかし、何故自分達がこんな場所にいるのか、皆目見当がつかない。

方綺は頭を抱えながら言った。

「一体、どうなっているのだ。我々は戦場にいたはずではないか？ おい、何か覚えていないか？」

黄騰も必死に記憶の糸をたぐり寄せていた。

「確か蜀の軍勢を破り、逃げ延びる連中を追って渡河の最中だった」

方綺も膝を打つ。

「そうだそうだ！ しかし、その先の記憶が無いのはおかしなことだ」

「うむ」黄騰は頭上の穴に向かって叫んだ。「おうい、誰かおらぬか！」

答えは無かった。方綺が肩を落とす。

「やれやれ、助けが来るのを待つより他無しか」

「いや、方殿。助けとは言うが、我々が井戸に落ちたとして、この鎖は一体何なのだ？」

「や、確かに」

ややためらってから、黄騰は最悪の予想を口にした。

「我々は、捕虜になったのではないか？」

「捕虜^{しよく}というと、蜀軍の？」

「他に何がある？」

方綺がわなわなと震え出す。

「捕虜だと。馬鹿な……しかし、何故牢獄ではなく、このような場所に」

黄騰は大小様々な戦をくぐり抜けてきた経験から、今度の事態がただならぬものであることを予感した。

「ここは井戸の中だ。わしらを飢え死にさせることも、生き埋めにすることも出来る……」

激しく首を振って、方綺が遮った。

「やめてくれ。聞きたくない」

「わしら二人、此度の戦では敵兵を十人以上も討ち取った。捕虜として目をつけられたとしてもおかしくはあるまい」

不意に、黄騰の頭へ何かが降ってきた。一瞬ぎよっとしたが、何のことはない、水滴が落ちてきたのだった。それでも、頭上へ目をやると——。

あの穴から、何者かが顔を覗かせていた。異様に白い肌、尖った耳と顎、線のような瞳。宦官だ。口元にはにたりと

笑みを浮かべている。

「おいつ、方殿、あれ――」

方綺もつられて顔を上げた。助けが来たとでも思ったのだろうか、彼は身を乗り出して叫んだ。

「おうい、助けてくれ！」

しかし宦官はじっとこちらを見つめるばかり、何の反応も示さない。

「ここはどこなのだ？ 何故我々を閉じこめる？」

すると、その宦官が二人の足下に何かを投げ入れた。見れば竹簡ではないか。黄騰が拾い上げて広げると、字が書かれていた。

姉妹の物語に出会う時

姉妹の物語に出会う時

中秋節。家族が団欒して過ごすその日、侍女の^{しゆんきょう}春嬌は寢床に横たわっている^{えんおう}鴛鴦お嬢様の看病にいそしんでいた。

「お嬢様、お薬ですよ」

「いらないっ！」

土気色の顔をした鴛鴦お嬢様は、どこからそんな力が沸いたのか、春嬌の差し出した薬の腕を思い切り弾き飛ばした。

「薬なんか飲まない。それよりお酒を持ってきてよ！」

春嬌は肩をすくめた。

「まあ、お体をいたわらないでお酒を飲もうだなんて」

「酒は百薬の長よ！」

「あら、でも『^{かんしよ}漢書』には『酒は百薬の長、^{かかい}嘉會（お祝い事）の好なり』ってありますわ。めでたい席で飲んでこそ、お酒は良薬なのですから」

春嬌が微笑みながら言葉を返すと、鴛鴦お嬢様は寢床の上で地団太を踏んだ。

「いいのよ！ あたし、今から寂しく死んでやるんだから。早くお酒を持ってきて。死ぬまで飲んで、さっぱりしてやる！」

春嬌が肩をすくめる。

「じゃ、わたくしがご相伴しなくちゃなりませんね。どこまでもおつき合いますわ」

「誰があんと飲むなんて言ったの。あたしは一人で飲むの！」

「もちろん、お嬢様が独酌をされるのは結構ですわ。わたくしもその横で独酌しますから」

「減らず口ばかり。お前なんか大嫌いよ！」

鴛鴦お嬢様は涙ぐむと、顔を背けて布団を被った。春嬌は苦笑して、床に落ちた薬の後片付けを始めた。

部屋の外から、談笑の音が風のように流れてくる。旦那様や奥様、それに鴛鴦お嬢様のご兄弟が中秋祝いで騒いでいるのだ。寢床を振り向くと、鴛鴦お嬢様の布団が小刻みに震えていた。

春嬌は胸が痛んだ。椅子を引き寄せて寢床の近くに置くと、静かに腰を下ろす。そして優しく声をかけた。

「お嬢様、あんまり心を痛めてばかりじゃいけませんわ」

布団を顔まで被ったまま、鴛鴦お嬢様が答えた。

「心が痛い方がいいのよ、泣いていた方がいいのよ。そうすれば死ぬんだから。こんな病気ともおさらば出来るんだから」

「せっかくの中秋じゃありませんか。そんな悲しいことをおっしゃってはいけません。何かお話でもしましょう」

「お前の話なんかつまらないわ」

「でしたら、物語をお聞かせしますわ」

鴛鴦お嬢様が、ようやく布団から顔を出した。重い病のせいで、幼い頃からなかなか寢床を離れられなかった彼女は、書物を読んで日々を過ごすことが多かった。とりわけ小説や講談の類が好きなのだ。

「物語ね。いいわ。じゃあ、物凄く悲惨なのを聞かせてよ」

春嬌は宙へくるりと視線を泳がせた。

「そうですね、じゃあ『^{ぼたんてい}牡丹亭』はいかがですか？」

「あんなの嫌！ 死んだ男と女が生まれ変わって結ばれる物語じゃない。ちっとも悲惨じゃないわ！」

「では『^{とうかせん}桃花扇』はどうでしょう？」

「もっと駄目よ！ 戦争で引き離された恋人達が再会するだけじゃない」

古今問わずに書物を読んできたためか、鴛鴦お嬢様の物語を見る目は俗世の人のそれよりもずっと優れている。

「あ、それならこんなお話がありますわ」

汚れの無い若者達

汚れの無い若者達

この部屋はおかしいんじゃないか。まるで換気がなってない。柳^{リウシーシュン}西春は唇まで滴ってきた汗を、舌の先で吸い取りながらそう思った。

眼前に座っている中年の面接官は、心地よい風にもあてられているような涼しい顔つきだ。なのに西春ときたら全身汗だく、シャツが背中にびっちり張りついている。くそっ、原因は俺じゃない。この部屋がおかしいんだ。

「〇×大学の出身か。専攻は何をやっていたんだね？」

面接官の唐突な質問に、西春は胸を張って答えた。

「心理学です。卒業論文ではファッションが人もたらす心理的变化について書きました。それでこの業界に興味がありました。広報を志望するのは――」

「君は農村戸籍のようだが」

相手のその一言が、西春の思考を瞬時に奪い取った。あらゆる言葉がはぎ取られ、無力になった気がした。面接官は西春に壊滅的な打撃を与えたことにも気がつかぬ様子で、淡々と続けた。

「残念だが、うちの会社に農村戸籍の受け入れは無い。帰りなさい」

ずっと、履歴書を突き返す。西春ははっとして、次の瞬間腹の底から怒りが沸いた。くそったれ！ これで何回目だ？ いいだろう。今日という今日は徹底抗戦だ。ここまで来ておめおめと帰れるか。

「僕は！」彼は部屋の窓がカタカタと震えんばかりに声を張り上げた。「他の人とは違います。戸籍で推し量れるような人間ではありません。僕は都市戸籍の人と同じ土台に立って大学を卒業しました。それで何がいけませんか。あなたは僕がこの部屋に入ってから、ただ渡された履歴書を見ただけだ。僕の何を理解しと言うんですか？」

「農村戸籍の者は、皆同じことを言うよ。駄目なものは駄目だ」

面接官の態度は軽蔑に満ちていた。こいつめ！ さっきは気持ち悪いくらいの笑顔で椅子をすすめたくせに！

「求人には戸籍のことなんて一言も触れていませんよ！ あなただって、今日まで何一つ僕には言わなかった。この会社を受けるまでに費やした時間はどうしてくれるんだ」

「言いがかりも大概にしたまえ！ 君という人間を知るための面接だ。だから呼んだ。君はそれに応じた。だがもうじゅうぶんだな。君を受け入れるつもりはない！」

面接官が履歴書を投げつけると、薄っぺらい紙は西春の顔に張りついた。彼は乱暴にそれを引き剥がし、大腿で部屋を出た。日が西へ傾いている。時計を見れば、もう五時を過ぎていた。さあ、どうする？ アパートへ戻るか？ それとも、この鬱憤を晴らしに場末の酒場にでも顔を出すか？ まったく、何から何までふざけてやがる。

結局、足はアパートの方を向いていた。風が吹きつけてきて、彼は顔をしかめた。北京^{ペキン}へ来てもう一年半経つのに、ここの風にはどうも慣れない。臭くて埃っぽかった。

人気の無い通りを歩いていると、背後から甘ったるい声に呼び止められた。